

本の万華鏡

推薦者

石川 英輔

(いしかわ・えいすけ)作家、ミカ製版取締役、一九三三年京都府出身。専門はカラー写真、カラー印刷、SF小説、江戸学。国際基督教大学中退、東京都立大学理学部中退。小説を執筆するかたわら、独自に江戸時代の資源、エネルギー問題を研究する。著書は、『大江戸神仙伝』とそのシリーズ、『大江戸えねるぎー事情』、『大江戸テクノロジー事情』、『大江戸リサイクル事情』、『大江戸ボランティア事情』(田中優子氏との共著)、『大江戸生活事情』(以上、講談社)、『総天然色への一世紀』(青土社)など。

『里のあかり』

金箱 正美 編著 宮本 辰雄 写真

◎一九八五年 信濃教育会出版部



現代人にとって照明とは電灯にほかならない。
蠟燭や石油ランプを使うのはめったにない停電のときぐらいで、普通は、暗くなればほとんど無意識のうちに白熱電灯が蛍光灯のスイッチを入れ、昼間と大して変わらない明るさにして仕事を続ける。今の私たちにはこれが当たり前の生活だ。

しかし、人類の歴史の大部分を通じて、照明のためには何かを燃やすのが普通だった。この点は、猿人洞で焚き火をしていた北京原人も、ベルサイユ宮殿で蠟燭のシャンデリアのもとに集った貴族たちも同じだったが、燃やすものの種類が多かったため、燃える炎を照明として利用するための道具も、実に種類が多かった。火は扱い方によっては危険でもあるため、ものを燃やす照明器具にはそれなりの工夫が必要だったからだ。

手元にある信濃教育会出版部刊の『里のあかり』という本は、金箱正美氏が収集された日本の古い灯火具のモノクロ写真集(撮影:宮本辰雄)で、国の重要有形民俗文化財指定の963点は、長野県小布施町の「日本のあかり博物館」に收藏、展示されている。

私は、江戸時代の照明器具の実物を見るために何度か通ったが、舞い錐、火打ち石などの発火具から、薪、木っ端などを燃やすためのヒデ鉢、北信州独特の寝曲がり竹を燃やす竹あかりに始まり、はしばみの実やえごま、なたねのような木や草の実を絞った油を燃やす油のあかりでは、ひょうそくのような素朴な道具から、短檠、瓦灯、行灯類など。さらに高級な蠟燭のあかり、石油のあかり、ガスのあかりまで揃っている。

燃やす、それも照明のためにものを燃やすという単純な目的に特化した道具を、少しでも使いやすいうように工夫しながら、いろいろな形に作り上げてきた人々の知恵や遊び心が次第に見えてくるせいか、半日眺めていても飽きなかった。

from editor's room CEL編集室が推薦する参考図書

『火の昔』柳田國男(実業之日本社 1944年、『柳田國男全集』ちくま文庫23 1990年)
『火の精神分析』ガストン・バシュラール せりか書房(1969年)
『日本古代文化の探究 火』大林太良編 社会思想社(1974年)
『火の思想』久野昭 理想社(1983年)
『ガス灯からオープンまで』中根君郎・江面嗣人・山口昌伴 鹿島出版(1983年)
『建築の絵本 すまいの火と水 - 台所・浴室・便所の歴史 -』光藤俊夫・中山繁信 彰国社(1984年)
『火のはなし』秋田一雄 技報堂出版(1985年)
『日本の名随筆73「火」』古井由吉編 作品社(1988年)
『ロウソクの科学』マイケル・ファラデー 角川文庫(1989年)
『炉の生活史』須山義幸 三省堂(1989年)
『火をつくる』小口正七 裳華房(1991年)

『民衆生活の日本史・火』林屋辰三郎編 思文閣出版(1997年)
『火の百科事典』樺山紘一他編 丸善(1999年)
『火と文明化』ヨハン・ハウツプロム 法政大学出版局(1999年)
『講座食の文化 第3巻 調理とたべもの』石毛直道監修・杉田浩一編 味の素食の文化センター(1999年)
『図面を引かない住まいの設計術』山口昌伴 王国社(2000年)
『日本人の住まい方を愛しなさい』山口昌伴 王国社(2002年)
『焚き火大全』吉長成恭・関根秀樹・中川重年編 創森社(2003年)
『スローライフ100のキーワード』辻信一 弘文堂(2003年)
『森の暮らしレシピ』ホークスみよし 小学館(2003年)
『暖房の文化史 火を手なずける知恵と工夫』ローレンス・ライト 八坂書房(2003年)
『食べる人類誌 火の発見からファーストフードの蔓延まで』フェリペ・フェルナンデス=アルメスト 早川書房(2003年)